

第8回 神の安息が神の民に残されている

第4章1節～13節 「神が安息の中でのみ 告げられること」

- 1 だから、神の安息にあずかる約束がまだ続いているのに、
取り残されてしまったと思われる者が、
あなたがたのうちから出ないように、気をつけましょう。
- 2 というのは、私たちにも彼ら同様に福音が告げ知らされているからです。
けれども、彼らには聞いた言葉は役に立ちませんでした。
その言葉が、それを聞いた人々と、信仰によって結び付かなかったためです。
- 3 信じた私たちは、この安息にあずかることができるのです。
「わたしは怒って誓ったように『彼らを決してわたしの安息にあずからせはしない』」
と言われたとおりです。
もっとも、神の業は天地創造の時以来、既に出来上がっていたのです。
- 4 なぜなら、ある箇所では七日目のことについて、
「神は七日目にすべての業を終えて休まれた」と言われているからです。
- 5 そして、この箇所でも改めて、
「彼らを決してわたしの安息にあずからせはしない」と言われています。
- 6 そこで、この安息にあずかるはずの人々がまだ残っていることになり、また、
先に福音を告げ知らされた人々が、不従順のためにあずからなかったのですから、
- 7 再び、神はある日を「今日」と決めて、かなりの時がたった後、既に引用したとおり、
「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、心をかたくなにすることはならない」
とダビデを通して語られたのです。
- 8 もしヨシュアが彼らに安息を与えたとするのなら、
神は後になって他の日について語られることはなかったでしょう。
- 9 それで、安息日の休みが神の民に残されているのです。
- 10 なぜなら、神の安息にあずかった者は、神が御業を終えて休まれたように、
自分の業を終えて休んだからです。
- 11 だから、私たちはこの安息にあずかるように努力しようではありませんか。
さもないと、同じ不従順の例に倣って墮落する者が出るかもしれません。
- 12 というのは、神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、
精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、
心の思いや考えを見分けることができるからです。
- 13 更に、神の御前では隠れた被造物は一つもなく、
すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。
この神に対して、私たちは自分のことを申し述べねばなりません。

(この講話は1996年8月10日(66歳)に行われました。松山先生のお生まれは1930年ですから、
原爆投下があった1945年には、先生は15歳でした。)

51年前の8月は非常に暑い日でした。特に、6日は朝からとても暑かったし、9日も非常に暑い日だったことを覚えています。それは、原子爆弾が広島、長崎にそれぞれ投下された日の記憶です。

そうした8月を迎える度、私共の教会では特に平和を覚える月間として、特別な祈祷会を持っています。そして今回は、その「平和」とも訳せる「安息」という言葉が持つ意味を越え、私共の生きる世界のその先に在す「**神の安息**」について、果てしない希望を抱き、深く思い廻らすために、この4章1節～13節の聖句を味わってみたいと思います。

因みに、4章1節からは、前回学びました3章7節以降の詩編の聖句について、更に説明を加えていますので、前の事柄との連携の中で取り上げるのが、よろしいでしょう。

そして、その先の14節からは「**偉大な大祭司イエス**」との小見出しがついていますように「**大祭司キリスト論**」という重要で新たな内容が展開されていくのです。そうした内容の開示に先立ち、神の御言に全きに聴き従うこと、それが私たちにとって「本当にどれほどのことか」ということを再確認するためにも、今回の箇所が記されているのです。

また、そのような意味で、私たちのあらぬ誤解への警告、或いは、勧告的な内容を表現するために、4章1節の終わりに「**気をつけましょう**」という促しが置かれていたり、更に11節の中ほどには「**だから、私たちはこの安息にあずかるように努力しようではありませんか**」という呼びかけが置かれていたり、致します。

それでは、本日のテキストに入ってまいりましょう。

第1節～2節

だから、神の安息にあずかる約束がまだ続いているのに、取り残されてしまったと思われる者が、あなたがたのうちから出ないように、気をつけましょう。

というのは、私たちにも彼ら同様に福音が告げ知らされているからです。けれども、彼らには聞いた言葉は役に立ちませんでした。その言葉が、それを聞いた人々と、信仰によって結び付かなかったためです。

<神の安息にあずかるには>

『**神の安息にあずかるという御約束**』が、かの日に成就するか否かの別れ道は、神が語られた福音を、信仰により真剣に聴き、自身のこととして受けとめたか否かに関わります。つまり、神がかつて語られた御約束が、我事のこととして心の裡に蘇り、それを、信仰における生き方、人生観と結び付けんと、今までとは違った「**神の安息に与る者**」という、**信仰者として新たな目標を掲げる一步を踏み出そうとする力となる**」ということです。

私たちが、先ず御言に聴き、更に示された聖書箇所を深く学ぶ、ということを繰り返していく必要は、**神の御言を受け入れ、聴き従い、それによって新しくされ続けていくためです**。別な言い方をすれば、神に選ばれし者として、絶えず、より相応しい者に創り変えられてゆくための更新（アップデート）を繰り返し、そのことが実は「神の安息」に入れる

ための基本的な条件だと言うのです。福音は、信仰を通して受けとめられることによって、初めて生きて、心の深部にまで届き、福音としての力を発揮するものとなります。

イスラエルの人々はかつて神から永遠の安息を約束されていましたが、彼らは、神の御言、唯それだけに聞き従おうとはせず、社会共同体を牽引する指導者たちの解釈による導きや裁きの掟に聞き従い、それらを優先したため、「神の安息」には入れませんでした。

何故、こんなことが4章の始めに書かれたのかと申しますと、丁度この手紙が執筆された一世紀の終わり頃、教会は迫害の嵐の中にあり、彼らにとって、そのような中で、世の現実を見据える時、目に見える形で神の約束が一向に実現していないことに、不安感を強く揺さぶられたのです。神の御言に対する一種の絶望感さえ感じてしまい、「信じているだけではどうも安心できない、もっと具体的に確実だと思えるものはないのか？」という「もの探しの罪」に傾注していったのです。

例えば、出エジプトの際、イスラエルの人々があの荒野の真っ只中で、モーセが神の山シナイ山に登って行って、戻って来ないという、具体的な指導者が欠落した状況に至った時、自分たちが今、外敵に襲われたらどうしようという懸念に捕われ、自分たちの護り主として、金の子牛を鑄造した。要するに、目に見え、手で触れられる、具体的な安心材料に取り合えず縋ろうとする、そういう人々はいつの時代も決して少なくないのです。

(今も同じ思いが世に蔓延していると感じます。)

この手紙を受け取った当時の教会でも、先ず、そのような護り主というべきもの、その意味での「異教の神々」が、彼らの生活の中心に座を占めるようになっていきました。特に人々をどんなことから守ってくれそうな輝かしい力を帯びる太陽、あるいは、すべての悪しきものを包み覆ってくれそうな強い力を帯びる闇、という自然や超自然現象が神々として祀られ、拝まれたり、畏れられたり、希望が置かれるようになっていったのです。

かつての遊牧生活からカナンに入ったイスラエルの人々が、農耕に初めて着手した時、何が何だかさっぱり分からない現実の中で、見廻してみますと、カナン人たちは、自然神を拝し、或いは農業神を打ち立てて、それらにかしづくことにより、多くの収穫がもたらされると信じていました。それらにイスラエル人も押し流されてしまったのと同じ状況が、正にこの手紙が書かれた頃のヘブライ人たちの中にも起こっていました。即ち、何か自分たちの手近な存在で、手軽に頼れそうな「神々」を探し出していったのです。

更に「神が守ってくださることはあるにはあるだろうが、自分たちの生活領域では、自分たちのことは自分たちで、即ち、より具体的な世間の知恵や技術、伝統や慣習等に基づく力で、生活を守れば十分」という発想が、私たちの中にも全くないとは言い切れません。

それを拵げれば、「日本国の自衛権」という問題もそうですし、「安保の問題」もそうです。正に、自分たちが外敵から攻められた時、自分たちの安全を守るためには、この世の力が攻めて来るのだから、それに対抗しうるこの世の力が必要なのだ、そういうものに

よって守るしか、身を守るすべがないのだという考え方は、キリスト教国と言われている国々にもあります。現実にはピューリタンとして新しい国を建てたアメリカは、何を隠そう、世界の中で一、二を争う武力、戦力をもった国、交戦力の大きな国ということになっているのです。そうしますと、ピューリタニズムとは一体何だったのか、ということが疑問になってくるのです。（実際、この疑問は大きく膨らむばかりです。信仰はかような現実との緊張関係、ある意味、戦いとも言えます。松山先生には、こうした現実からの逃避がありませんでした。）

私たちはそうした「この世の現実」と、神の御前に生きるという「神の現実」との狭間で、様々な形で自己選択を繰り返し、この世の様々な知恵を導入して、身の安全を処しています。その「安全性」に囲われれば、安心して信仰生活も送れるのだ、という錯覚の中で自分を納得させています。そういう在り方がいつの間にか定着してしまったのですが、この手紙の対象になっているヘブライ人たちも、同じような考え方の中にあったのです。著者はそういう意味で「彼らを異教の神々と、何とか対決させていかねばならない。」とか「目に見える頼りになりそうなものに心が奪われている態では、目に見えぬ神を拝することなどできない」という危険性を、是が日に訴えねばならないと考え始めたのです。

更にもう一つの危険性は、「自分が神と結び付いていることを、何とかして具体的に自分自身が実感して生きてゆきたい」という本質的な願い、これは色々な形をとって出てまいります。例えば、ロシア正教では、自分が神に守られていることを具体的に自分自身に印象付けるために「イコン」（キリストの肖像を描いた小ぶりの絵画）をすごく大事にしていって、それを所有することによって、自分や家族は守られていると考えました。そして、御守りのような、免罪符のようなものとして、イコンが自分たちの生活には欠かせないものとなっていきました。

ある信仰深い家庭では、戦いの時、敵の弾が飛んで来て命が危うくなった時に、このイコンがその弾の的となって避けてくれ、先祖は死なずに済んだという言い伝えを、弾の跡が残っているその「イコン」を指し示すことによって証し続け、神は確かにあなたたちを守っていてくれるのだと、子どもたち、子孫たちに、語り継いでいったとのこと。正に、そういう「目に見える証拠の存在」が、信仰を保ち続けていくためには欠かすことができぬ「神の立証」なのだと、一般にはそう考えられています。

＜救いの確信を律法に求める人々＞

当時、この手紙を受け取った人々によって構成されていた教会も同じように、指導者ラヴィたちが定めた様々な掟を完全に守り切ることによって、自分たちは神から守られている、支えられているという確認と確証を得、「律法の行いにより、自分たちは神の救いを具現化することができる」という考えがだんだん重んぜられるようになっていきました。つまり「唯、福音だけが大事なのである」という信仰ではなく、その福音は、神の御言（見えざる信仰的規範）よりも、ラヴィが定めた掟（可視的行動規範）に従う方が、より確かなものになる。「これ程まで掟なる言葉に従い得ているからこそ、救いは今ここにあるはずだ。」という（自分たちが勝手に解釈して拵え上げた）掟を守る外的要素によって、自分の内的信仰を補って行こうという動きが盛んになっていきました。結局、そういう風に具体的に自分たちが何か、手にしたり、行ったり、目で見たり、図ったりすることができ

るようなものがないと安心できない、そんな安価な手応えを求めなければならないほど厳しい現実の中で、当時の教会生活は営まれていたのです。（こうしたユダヤ人の状況は、今も変わりません。）

そういう状況に対して、この手紙の著者は「ラヴィが定めた掟が、信仰によって御神の御言と結び付かなければ、どんなにその掟に従っていても意味がない。」と告げ、更に「あなたがたが今、神の御言と結びついているつもりであっても、あなたがたの生き方そのものが信仰的ではなく、単に律法の行いの遵守にすぎないのであれば、それがどんなに豊かなこの世の繁栄に結びついたとしても、それらは神の御言とは結びつかず、究極の安心安全（御国での神の安息）を保障してくださる神の力とは。決してなりえない。」と、懸命に告げているのです。

第3節の前半、

信じた私たちは、この安息にあずかることができるのです。

「わたしは怒って誓ったように、『彼らを決してわたしの安息にあずからせはしない』」
と言われた通りです。

著者は、詩篇95：11を引証しながら、これを記してゆきます。神は背信の民イスラエルに対して、安息に入ることを赦されなかった。そうした出エジプトの出来事を取り上げながら、そういう状況を引き起したのは「実は、安息に与ることができる可能性をあなたがたに残すため、その背信者を反面教師と成したのだ」という分けがあるのです。。

つまり、神の御命令に従い、神のみを信頼して拝しておれば、神が与えられた安息の地カナンに、イスラエルの人々は、御約束通り、すんなりと入ることが適ったのです。けれども、カナンは彼らにとっての究極的な安息地ではないと勝手に判断し、彼らは異邦の神々を拝み始めて主なる神を試み、退け、そしてイスラエルの神から離されて行った。言い換えるなら、「神が与えてくださるはずの安息地の望みが彼らの裡には消え失せて、様々な手立てを労することによって、自分自身で自己防衛をする以外になかった。それは彼らが、真の信仰に立ち続けられなかったからだ」ということなのです。

正にあのガリラヤ湖上で激しい風に悩まされた船の中で、弟子たちがイエスに向かって「あなたは、私たちが死んでしまっても構わないとお考えなのですか！（マルコによる福音書4章38節）」と非難を叫んでいたのと同じ状況です。

イエスが共にいてくださることは、彼らにとって守られることの保証にはなっていないのです。嵐が実際に静められなければならないのです。イエスが共にいてくださっても（そこは既に神の御国であるが）、彼らは「私たちは死にそうです」と訴えてきます。「自分たちがそこで死にそうだと考えていること自体が、不信仰なのだ」ということが彼らには全然理解できません。むしろ「この現実の中では、船の中で眠っておられるイエスこそ、無情で酷い御方なのだ、こんなにも私たちが困っているのに知らん顔されている、それでも、私たちの指導者なのか！」と、彼らはイエスに詰め寄って来るわけです。

「そうした彼らが求めるこの世の平安（即ち、最悪なる死を避けること）と、神が既に与えてくださっている御国の平安（もはや死は怖るべき最悪ではなく、御国への門）との大ギャップ」が、私たちの信仰生活の中にも、あらゆる場面で頭をもたげてきます。そのことを、この著者を通して「それは、あなたがたに神が与えてくださった『神の安息を与える約束』をしっかりと握っていないからだ」と言わせているのです。

「神の安息は、既に他の人々（異邦人）のためにも用意されている、そういう神の御心を悟らせるため、イスラエルの人々を敢えて神の安息には入れなかった」と受け取れるようにも記されていますが、著者の真意としては「不信仰に対する神の厳しい裁きを、あなたがたはしっかりと受けとめていないではありませんか！」と告げて、それを4節に繋げています。かような非常に重要な提言が、ここに為されているのです。

第3節の後半～7節

もっとも、神の業は天地創造の時以来、既に出来上がっていたのです。なぜなら、ある箇所では七日目のことについて「神は七日目にすべての業を終えて休まれた」と言われているからです。そして、この箇所でも改めて、『彼らを決して私の安息にあずからせはしない』とされています。そこで、この安息にあずかるはずの人々がまだ残っていることになり、

こうして、先に福音を告げ知らされた人々が、不従順のために、それに与らなかったのですから、再び、神はある日を『今日』と定められ、かなりの時が経った後、既に引用された通り、「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、心を頑なに**してはならない**」とダビデを通して語られたのです。

この考察の中で、私はイエスが語られた一つの警えを思い起こします。

ルカによる福音書14章15節のところの「大宴会の警え」です。

「**食事を共にしていた客の一人は、これを聴いてイエスに、『神の国で食事をする人はなんと幸いなことでしょう』**と言った。そこで、イエスは言われた。ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に「もう用意ができましたからお出でください」と言わせた。すると皆、次々に断った。最初の人**は、『はたけを買ったので、見に行かねばなりません。どうか失礼させてください』**と言った。ほかの人**は、『牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところ**です。どうか失礼させてください』と言った。また別な人**は、『妻を迎えたばかりなので行くことができません』**と言った。僕は帰って、このことを主人に報告した。」

このところを熟読しますと、神が大宴会の招待状を送っておいたのだけれど、彼らはその日のことを自分の生活の中できちっと位置づけておかなかったのが、ころっと忘れていて、自分たちの計画を先行させた、ということがよく分かるのです。-

「用意ができましたから」というのは約束しておいた日に至ったので、神がその人々に案内人を送った。ところが彼らは、神の宴会への招きのことなどすっかり忘れていて、この世で自分のやりたいことを行うため時間は埋め尽くされており、「神の御前に出てゆく時間など、私には到底ありません、とても忙しいのです。」とお招きをお断りしたのです。

「神の御約束を信じる」ということは、そういう意味では大変厳しい言葉のようですが、
実は、その日を準備してひたすら待ち望むことなのです。そこに最優先の予定を入れない
で、その日を人生の頂点として待つことなのです。ところが「その日までには十分な時間
があるだろうから、これをやろう、あれをやろう」というのが私たち人間の思惑なので
す。そうこうしているうちに、その日、その時刻の寸前までそれをやることにしまし
て、とうとうその大宴会へのお招き（御国における神の安息）に与ることができなくな
ってしまいました。言い換えるならば、彼にとっては神の大宴会に列席するよりも、今、自分が
やろうとしている具体的な自分の繁栄のための仕事の方が大事だと考えたというのです。
牛を見て来ること、買った畑を自分自身で確認しに行くこと、あるいは嫁を迎えることの
方が、神が招いてくださった大宴会に出ること以上に大事なことである、喫緊の課題とす
べきことであると判断した、そういう事態に陥るのです。（耳が痛いです。）

ところが、その後、招きに遣わされた僕は、このことを主人に報告すると、家の主人は怒っ
て、僕にこう言うのです。「急いで町の広場や路地に出て行き、貧しい人、体の不自由な
人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい」と。言い換えるならば「誰
もが顧みてくれないので、顧みてくれる人を求めている人々に声をかけなさい。そうすれ
ば彼らはすぐに応じるだろう」と。

勿論、ここではルカ独特の皮肉たっぷりの表現があるわけですが、健全な人間は自分で何
でもできるから、神の御声に聞き従う必要性を感じていない。そして、そういう人々は、
そのような「聞き従わねば、生きられぬ弱さ」をもった人々を一人前だと思っていない。
つまり、人から人とは思われてはいないような貧弱な存在は、神の招きに喜んで応じるだ
ろうが、自分を義人だと自負する人々は、神の御言においそれと応えようとはしない。し
かし、自らが罪人であると自覚し、心の内にその痛みを覚えている人は、神の呼びかけに
すぐに応じることができるだろう。「人の子は、（自称）健全者のために来たのではなく、
病める者、いたずきを負う者のために来たのだ。あるいは、滅びの状況の中で悩み苦し
んでいる人々を救うために来たのだ。」というイエスの御言は、正にそういう形で具現
化されておられるのです。

この手紙の中でもそのような事柄を、旧約の出来事との兼ね合いの中で語っていきます。
イスラエルは神に招かれ、そしてその招きに応じてカナンの地に向かった。しかし、そこ
で神の御約束を待ち切れなくなり、神の御言に背く行為を行なった。自分たちに都合の良い文化を作り、文明を作り、勝手に王を立て、遂に自分たちの欲望を満たすために戦いを
仕掛け、あるいは勝手に同盟を組み、イスラエルの国をめちゃくちゃにしまった。神
御自身を崇めるよりも、自分たちの繁栄をひたすらに祈り求め続けた。その結果、もう神
は、そんな彼らに、神の安息を与えることはできないとお考えになった、と、そんなこと
を通して語っていくわけです。

（1996年から四半世紀経過した今は、この現象は更に激しくなっています。現実を直視され、行動し
続けられた松山先生の予想通りが進んでいます。先生がおられたら何と言われるでしょうか。）

＜神の安息に連なるためには＞

そして、この3節の後半から「安息」という問題を、著者は大問題として取り上げて語っていくのです。神は六日間で「＊この地におけるすべての創造の御業」を完成なさった。そして七日目から神は永遠の安息にお入りになり、それ以降、この地においては、創造の御業は行われなかった。そういう捉え方をしているわけです。そして神は、その時お入りになられた安息を「今」に至るまで継続しておられると、この手紙には記されています。

（＊創世記における天と地との創造の御業は、端的に言えば、「分ける」という御業と「集める」という御業であられました。そうした天体形成としての地球の創造はそこで既に成就されました。しかし、そこからの地上の歴史、個々の人間の救済史を形作るという創造の御業は終わってはおりません。そこから神様は七日目の「熟慮なるひと日の安息のとき」を過ごすされました（アオリスト形動詞）。その後、創造を再開され、今も、終末に至られる日まで、日夜それを継続なさっておられると受け取れます。ですが、それらすべての御業はもはや地上ではなく、御国において継続され続けている御業と言えましょう。新約聖書ギリシャ語訳義事典（安息：カタパシス、安息する：カタパウオー）によりますと、「神の安息とは、安住の地、憩いの地、即ち、神の御住まいなる御国に在すこと」とあります。

しからば、人間が神の安息に与るとはどういうことかと言えば、死後に神の御国へ誘われることであり、キリストの再臨の日を意味するとも言えるでしょう。また、それまでの期間は、御国の雛形なる（御国の大使館とも言われる）キリスト教会の礼拝等に定期的に与ることが、神の安息に与ることに準拠すると言えるでしょう。つまり「神が約束された神の安息」とは、この世での仕事を出来るだけ休んで、何もせずに、神の御心として心身の休息を十分取って過ごすことではないのです。「神の安息」に与るのは終わりの日、終末における事柄であって、それまでの準備段階として、礼拝、聖研祈禱会、諸々の奉仕、そして悔い改め、執り成し、讃美、感謝の祈り、兄弟との良きお交わり等が挙げられると思います。因みに旧約では、この御国を、乳と蜜が流れる地であり、出エジプトの到達地点であるカナンの地になぞらえ、御心を弁えぬ民が、そこへの到達を虚しいものとしてしまったイスラエルの罪が語られています。 森牧師)

「今、神が持つておられる安息」に、神は私たちが招き続けてくださっています。神が用意しておられる安息に連なるためには、私たちは何をしたらよいのか。そうした思案時には、この世の業を完全に止め、「神の安息」への思いに浸らせて頂くのが最善なのです。

＜安息は神の命令＞

ですから、神の御前に生きていこうとする時に、私たちはこれこれの事柄を十分に成し終えましたから、お休みを頂きますという終わり方では、聖書でいう安息にはならない。ノルマを達成していようがいが、「神が今休止せよという選択を命じられたので、自分の仕事をしないで、神の御召しに従う。」それがここでいう「神の安息に与る」という言葉の真意なのです。先程、イエスが語られたルカによる福音書の大宴会の譬えを引用しましたが、この大宴会こそは、御国への帰還の日を意味しているのです。

しかし、ヨシュアによってヨルダンの川を越えて、カナンの地に至ったイスラエルは、一一応、神が示される安息の地に入るは入ったけれど、それから400年経っても、それ以上経っても、魂の安らぎなる真の安息は得られなかった。その先ダビデが王位に就いて国を治めた時、こんな詩を謳っています。「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、心をかた

くなくしてはならない」と。ダビデは「未だ、神の安息は実現されていない、成就されていない」と謳っているのです。

第8節、9節、

もしヨシュアが彼らに安息を与えたとするのなら、神は後になって他の日について語られることはなかったでしょう。それで、安息日の休みが神の民に残されているのです。

もしも、ヨシュアの時代から真の安息が与えられていたならば、神はその後（ヨシュアからダビデへの400年後）になって「今日、あなたがたが御声を聞いたならば・・・」などと仰るはずがなかったのです。ダビデにそう言わせているのは、まだ「我らの安息は完成していないのだ」ということを、ここで語っているのです。

安息日として休みの形態が尚残されているのは、正に、神があなたがたに本物の安息を与えてくださろうと、安息がまだ神の御許に留保されているからなのです。

第10節、

なぜなら、神の安息にあずかった者は、神が御業を終えて休まれたように自分の業を終えて休んだからです。

要するに、神が与えてくださる「神の安息」に入るには、いつでも、私たちはこの世の業を止める決断を準備していなければ、実際に、神が安息を与えてくださる際に間に合わず、それを得ることができなくなり、「断って自分の仕事に行ってしまった、あの大宴会に招かれた人々と同様になってしまうだろう」ということをここで語っているわけです。

「中途半端になっても、自分の業を終わりにする」ことは、一番躊躇われる事柄かもしれませんが、私たちににとって最も重要なことは、この世において、名声を博したり、豊かになったり、成功を遂げることではない。神の招きにお応えして、最終的に「神の安息に入ること」です。だとするならば、この世がどうであろうと、常識がどうであろうと、そんなことに振り回されているのではなく、神が私と共にいてくださるという平安の中で今を生き、その恵みがあなたにも御用意されているのだということを経験し、それを隣人に伝え続けてゆく、そうしたことの中に、この世においても「神の安息の前味」があるのではないのでしょうか。」

「御言を宣べ伝えなさい」と言うパウロの「御言」の真骨頂とは、何を意味しているのだろう、と思い巡らすとき、「あなたが神の安息を信じ切って、その真実なる安息を宣べ伝えるということ」でなければならないと思うのです。そうした私たち一人一人の在りようというものも、この手紙では、さらけ出されて来るのではないのでしょうか。

「安息を得ていない人間が安息を語っても、それは安息の話にはなりません」というのが、やはりこの手紙の中で訴えられている一つの特徴です。だから、あなたがたは異教の神々や掟を守ることによって自分自身が完成してゆくような錯覚に落ち込んではいけません

んよ。あなたがたが完成するのではなく、神があなたがたと一つになってくださる「神の安息」こそが、あなたがたの究極の完成です、それがまさしく福音なのですから。

私たちは様々な欠点や欠陥という破れを持ってはいるけれども、神の安息に与ることがゆるされる望みを抱き、私たちがこの世の業を止めて神の御前に膝をかがめる時、神はすべてを良きものに変えてくださり、祝福の材料として生かしてくださる。それは、私たちに与えられている真の恵みなのだと感じるができるようになります。

(この実感を私が味わったのは80歳を超えていました。時を得た感謝が今ここにあります。)

第11節、

だから、私たちはこの安息にあずかるように努力しようではありませんか。

さもないと、同じ不従順の例に倣って墮落する者が出るかもしれません。

「だから、私たちは神の安息にあずかるように」ということは、神の御国だけを目当てにして、かの日には、この世の一切をきれいさっぱり捨て去ることができるよう「努力しようではありませんか」ということです。本来、人間は神を讃えるために、神を共に喜ぶ者として、創られた存在なのですから。それを互いに覚えようではありませんか。

けれども、どうも私たちの生活はだんだん神から離れてノルマに傾いていき、ノルマを果たすために努力をすることが大事な使命とも考えるようになりました。それで、私たちは努力しないと、仕事を休むことさえできなくなりました。

私の場合を例にとりますと

学校勤めをしていた頃、二月位になると何時も決まって一週間位すごい熱が出て動けなくなり、神に休ませられたのです。「やあ、また神様に叱られちゃった」と思うのですが、次の年も二月はちゃんとそうなるわけですから、初めから休みの日程を用意しておけばいいのですが、やはり二月になって休ませられる日の直前までは頑張ってしまう。そしてまた大体入学試験の後くらいにばーっと熱が出るのです。そういう馬鹿真面目の愚かさを繰り返していたのです。

そういう自分がやはり、それでも尚、神の安息が、この私にも残されていることを信じるからこそ、神の御前に生きることがゆるされているのです。こんな者を神は顧み続けてくださることを信じるからこそ、私たちは神の御前に生きることができるのだと思います。

第12節、13節、

というのは、神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髓とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです。更に神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、私たちは自分のことを申し述べねばなりません」

終わりの二節も大変厳しい言葉ですが、その前の節を受けていると捉えることができます。「私がこんなに必死になって、あなたがたに『休みなさい』と言っているのは、神の

御言がいい加減なものではないからです」。これは「**両刃の剣**」という言葉で書かれています。この両刃の剣は、当時、彼らが生活をする中で何時でも身につけることのできた道具の中で一番鋭利な道具なのです。切れ味が良く、どんなものでも刺し貫くことができた道具なので、当時のユダヤ人の社会では、神の御前に犠牲を献げる時、その犠牲を二つに引き裂く時にこれを用いたのです。それほどに鋭い刃物であるわけです。そんなに大きなものではなくて、小さなものであったようです。そんな両刃の剣というのがここに描かれているのです。

両刃の剣に譬えられる神の言葉は、あなたがたが常識的に考えたならば、分離することなどできないと思われるものまでも分離することができる鋭い力をもって、私たちに迫って来るものなのです。

例えば、私たちの内面的な生活における「精神と霊」は、区別することが出来ないけれども、神はきちんとそれを2つに引き裂かれ、区別される力をもった御方なのです。また「**関節と骨髄**」というのは私たちが生きて行くための一番基本的なもので、これを切り離すなどというのは考えられないけれども、神はこれを切り離すことができるほどに鋭利な「**神の御言**」をもって、私たちに臨んで来られるのです。そのようにこれは書かれているわけです。（これをいのちの御言として受け留めるには、神との「**安息の時**」がどうしても欠かせません。）

神の御言は、私たちの奥の隅の隅までもきちんと見定められる、はっきりとさせることができる、そういう御力をもっていらっしゃる、それが神の御言なのです。そして、そういうことのために私たちは神の御前に隠し事などとてもできません。（ヨハネによる福音書2：23-25「イエスは、何が人間の心の中にあるかをよく知っておられたのである。」を思い起こします。）

「**すべてのものが神の目の前には裸であり、白日にさらけ出されているのです**」と13節に記されます。私たちはこの世においては、様々な自己アピールの借り着をまとうことにより、自分という存在を多少イメージアップできますが、神の御前ではそんな「**衣装**」は何の役にも立ちません。ただ、神の御前に、今どのように歩んでいるかだけが、問われるのです。私たちは、裸の自分自身をはっきり意志表明しなければなりません。そのお方の御前で、ただ悔い願って、憐れみを求める以外に道はないのです。神はそんな私たちを赦してくださり、尚も安息に招くことのできる存在として、私たちを捉えていてくださいます。

＜神の安息ということがもっている意味＞

このことをちょっとまとめて終わりたいと思います。三つにまとめてみました。

先ず3節、「神の安息に入るための約束は、まだ私たちのために残されています」、と呼びかけます。その「神の安息」とは何かというと、「神を信じている人に与えられる霊的な意味での永遠の安息」という表現で書かれていますから「**霊的な安息**」が第一番目だろうと思います。

また6節や7節のところを見ると「今日」ということが語られながら、安息にあずかる人や時間がまだ残っていると、色々な表現で安息ということが語られていますけれども、「かつてイスラエルの人たちは、与えられた約束の地カナンに入ったけれども（即ち、場所的とか領域的などという安息）、ここに入るだけでは本当の安息ではなかったのだということ。それが「第二番目の点での安息」です。約束の地に入ることとは、神の招きに応じて、自らの身を神に委ね切ることです。

三番目には、本当の神の安息とは、神が天地万物の創造の業をなし遂げられ、それから、神の安息の地、御国において、神は、人類の救済の歴史、私たちの御国への招きの準備を開始されました。そして、神が私たちに願い求めておられる「絶対的な神の安息」なる地がご準備されて、既に存在し、神は私たちを待っておられるのです。

以上の三つの観点からこの箇所では安息が語られていますが、結局、「福音を聞かされた人々は不従順のためにその安息に入れなかった」と言い、そうならないように警告しているのです。

『心を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くして』神に集中して神を礼拝し、神と共にある時にこの約束は完成されていくのだ。神はかように、終わりの日に向かって近づいて行くよう召してくださるのだ」と語られていきます。神の約束は今なお具体的な形で、この歴史の中で次第に明確になりつつあるのです。それを見つめ続けていかなければいけないのではないのでしょうか。

それでは、安息を与えようと約束したのに不従順だったから、神の約束は無効になってしまったかと言うと、決してそうではありません。「今でも神の安息に入ることはできる」と、聖書は私たちに約束をしてくださっています。そしてヨシュアはその約束の地カナンに入ったけれども、そこではまだ完全な形で神の約束は成就されてはいなかった。つまり、カナンの地は「永遠の安息のひな型」として示されているに過ぎなかったのです。

「平和」が、この敗戦国で一つの大事な方向性を与える言葉として与えられてから、もう戦後51年過ぎました。そして、私たちを取り巻いている状況は、平和ということとはどんどん引き離されてゆきます。神が与えてくださる究極の平和「神の安息」に対して、私たちは信頼をしてその御方の恵みの中で、自分の力に頼ることを止め、平和を作り出すために生きてゆきましよう」と決心をしたのです。

その決心は、この国の憲法の前文にちゃんと書いてあります。ところが、平和を維持するために軍隊を派遣しましょう、と国は言い始めているわけです。そこでいう平和は、神の平和ではないのです。人の力関係によって平和は成り立つという論理に立ってる、完全な自己と神との分裂がそこにはあるのです。そういう思想の中に平和は成り立って来ない、神だけに寄り頼むことができなくなって、自分の力や知恵によって平和が作れると考え出した時、私たちは神を捨てるのです。神を捨てたところに「神の安息」はない。そのことを本気に考えるようにという深い神の憐れみが、このヘブライ人への手紙を通して私たちに、「神の安息を求めて生きなさい」という呼びかけとなって現されているのです。（国

会の前でデモ隊とは離れて独り祈られた先生の実践力はこの信仰の基盤に立つ行動であられたと偲びます。
このフレーズは松山幸生先生だからこそ語ることができる内容だと思います。)

私たちの周りに起こっている様々な出来事を考えると人間の力は、知恵は、そして今日の科学は、すごく進歩したと言えるのですけれども、「あなたがたの力は限界があるのです」と呼びかけて、「本当の神の安息が何であるか、今一度自分がなし続けて来たことを一旦止めてみて、静かに聖書の前でお考えなさい」と神は呼びかけているのです。(コロナ禍を経験した今、松山幸生先生の30年前のご指摘が今も強烈に現実になっています。松山幸生先生の嘆きは深まるばかりです。)

(私たちはコロナを経験しました。同じようなことが世界規模で起きたことに驚きます。歴史の積み重ねを学び、人間の繰り返しの罪を知ることは特にリーダーには求められると思います。)

「神の安息」は、死を超えて甦えられ、昇天を果たされたイエスしかもっておられません。ですから、その御方と御一緒に在る時にしか、私たちに真の安息は得られないのではないのでしょうか。それゆえ、この世における一切の思い煩いから自身を解放し、心静めて、神の御言だけを忠実に聴いて行くことができるような人生の完熟期、再臨のイエスだけを仰ぐ終末期が与えられる時、本当の平安なる「神の安息」への希望が私たちを照らし、包んでゆくのだと思います。

(1996年8月10日)

説教

「キリストの復活は、私たちの復活へ」

コリント信徒への手紙15章1節－11節

森 容子

皆様、こんにちは。今回も共に、聖書に潜められた主の深い真理と御心を味わいましょう。そして、主の福音の光を浴びつつ、御国までの遥かな道程を、主と共に歩んでゆく喜びと感謝を、確かなものと致しましょう。

1－2 兄弟たち、私があなたがたに告げ知らせた福音を、ここでもう一度知らせます。これは、あなたがたが受け入れ、生活のよりどころとしている福音にほかなりません。どんな言葉で私が福音を告げ知らせたか、しっかり覚えていれば、あなたがたはこの福音によって救われます。さもないと、あなたがたが信じたこと自体が、無駄になってしまうでしょう。

パウロは、かつてコリントの教会の人々に伝えた福音 (Good News) を「もう一度知らせます。」と述べています。この「福音」とは、例えば、ロマ書4：24b－25に「私たちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じれば、私たちも義と認められます。イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義とされるために復活させられたのです。」と記されます。パウロから伝えられて、それを受け入れたコリントの教会の人々にとって、既にその福音は、「生活の

よりどころとしているもの（原典では「その内に立っているもの」）、即ち、日々の命の糧、人生の中心に据えている御言葉だった“はず”でした。

ところが、今やコリントの教会は、この先12節でパウロが「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。」と詰問するような、信仰における非常事態に陥っていたのです。

更にパウロは、続く13－15節で「死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。そして、キリストが復活しなかったのなら、私たちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」と、わざわざ逆説的に語りかけて、注意を喚起しています。

つまり、伝えられた福音を、主の御言としてしっかり捉え、それを信じ握りしめておれば、終わりの日、即ち、復活の日に、永遠の命の授与という輝かしい救いが訪れます。けれども、「キリストの復活」への信仰、信頼があやふやになれば、その人自身の救いや復活もあやふやなものとなり、総じて、これまでの宣教も信仰も皆、無駄になってしまう、なしくずしの総崩れ状態となってしまうと、パウロは警鐘を鳴らしているのです。

このように、この世の常識や価値判断に捕らわれて、神様がもたらされた救いの恵みが見えなくなった人々を、パウロは19節で「すべての人の中で最も惨めな者」と呼んでいます。復活の体や永遠の命という「神の約束された御国のビジョン」、人間の可能性の枠を超えるような、遥かな望みは失われ、彼らには、もはや未来のビジョンが成立しなくなる、ということです。

そこでパウロは、自分の責任において、もう一度コリントの教会に「キリストの復活」について正しく伝えよう、是非とも伝えねばならない、と決心し、この手紙を記したのです。原典には「もう一度」という言葉はありませんが、それを挿入した方が、意図は伝わりますね。

キリスト教は一口に、主の十字架とご復活を中心とした福音信仰と言われますが、私たちも、伝えられて信じている福音の内容をよく吟味し、把握することが肝心で、いつでも主の十字架と復活の意味と内容を、世の人々に弁証できるよう準備するには、福音を正しい言葉で、正しく理解しておく必要があるのです。

それでパウロは、まずは復活について、聖書には何と書かれてあるかを、知らしめ、それを吟味させることから始めました。

3－6 最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりのわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりの三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたらしろ、大部分は今なお生き残っています。

キリストの福音は、主イエス・キリストが、私たち人類の罪責の贖いのために十字架上で死なれたこと、葬られたこと（これは、キリストの死が完全なものであった証拠として重要です）、そして、三日目に復活されたこと（これはパウロ自身も受けた証し）からなる福音であり、彼が新たに考え出したり、独自に見出したりしたことはありません。そして、これらは代々、キリストの教会が受け継いでゆくべき、信仰の根幹的な事柄です。

「キリストが私たちの罪のために死なれたこと」も、「キリストがお墓の中から三日目に復活されたこと」も、「その復活の主が、エルサレムやガリラヤ湖にてケファ（ペトロ）たちに現れられたこと」も、4つの福音書に其々のスタイルで記載されています。

また、旧約聖書の中にも、「私たちの罪の贖いのために死なれた御方のこと」はイザヤ書53：9－12に、「三日目の甦り」はホセア書6：2やヨナ書2：1に、そして「甦りの預言」はイザヤ書26：19やダニエル書12：2－3にあります。

イザヤ書53：9－12

彼は不法を働かず、その口に偽りもなかったのに、その墓は神に逆らう者と共にされ、富める者と共に葬られた。病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは、彼の手によって成し遂げられる。彼は自らの苦しみの実りを見、それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った。それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびたしい人を受けける。彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった。

ホセア書6：2

二日の後、主は我々を生かし、三日目に、立ち上がらせてくださる。我々は御前に生きる。

ヨナ書2：1

さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。

イザヤ書26：19

あなたの死者が命を得、わたしのしかばねが立ち上がりますように。塵の中に住まう者よ、目を覚ませ、喜び歌え。あなたの送られる露は光の露。あなたは死霊の地にそれを降らせられます。

ダニエル書12：2－3

多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り、ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる。目覚めた人々は大空の光のように輝き、多くの者の救いとなった人々は、とこしえに星と輝く。

また、ご復活の主が「ケファに現れ」とペトロの名がまず挙げられているのは、彼が12弟子の筆頭と認められていたためでありましょう。実際、復活の主がお墓の付近で最

初に顕現されたのは、ヨハネ福音書によれば、マグダラのマリアを始めとする婦人たちでありました。

更に、「五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました」という出来事の「五百人以上」という具体的な数字は、ここにしかない記述で、ペンテコステの出来事を指しているという説もありますが、判然とはしません。その後、エマオへの途上で復活の主にお会いした弟子のクレオパ夫妻が、エルサレムの弟子たちの所へ戻り、喜びの内に仔細を報告していると、そこにも復活のイエス様が現れられました。このときの驚きと感激は、以下のルカ福音書24：36－48に詳述されています。

こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えたとおり、わたしにはそれがある。」こう言って、イエスは手と足をお見せになった。彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。

7－8 次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、そして最後に、月足らずで生まれたような私にも現れました。

ここに、復活証言者の二番目に挙げられているヤコブは、ヨハネの兄弟のヤコブではなく、主の兄弟のヤコブであり、初代教会のリーダーとなった人物と言われております。

また、「月足らずで生まれたような私」とパウロが自身を述べるのは、復活の主が直接現れて下さった者こそが「使徒」と名乗ることが許されるという前提で、述べているのでしょうか。かつて、ユダヤ当局側の人間として、キリスト者を迫害していたパウロ（当時はサウロ）は、ダマスコへの途上で天から強い光を浴び、3日間盲目になっただけでなく、キリストの御声が直に聞こえたのです。「わたしが、あなたが迫害しているイエスである。」と。

9－10 私は、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。神の恵みによって今日の私があるのです。

そして、私に与えられた神の恵みは無駄にならず、私は他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実は私ではなく、私と共にある神の恵みなのです。

パウロは、生前のイエス様に直接お仕えしませんでした。自分こそが「最後の使徒」であるという自負を持っていた、というよりも、「神の教会を迫害したのですから、使徒の中で一番小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です」という自分の大罪と無価値性を深く悟っていた人でした。

そして、赦されざる罪人、「罪人の頭」なる自分さえも、主に赦されて、救いに与り、使徒としての働きを与えられているのは、復活されて、今を生きておられる主イエス様が、自分に現れ、自分を選んでくださったゆえだと、使徒言行録の中で三度に亘って証言しています。生けるキリストとの出会いとお交わりこそが、パウロの告げる福音の中心であると証ししているのです。

また、「他のすべての使徒よりずっと多く働きました」とは、原典では「疲労困憊するまで働き続けました」となっています。かつての迫害者を、これほどまでに熱烈な宣教者へと変えられたのは、主からの圧倒的な恵みの光が注がれて、その後もその光の中を、主と共に歩み続けてきたゆえでしょう。

11 とにかく、わたしにしても彼らにしても、このように宣べ伝えているのですし、あなたがたはこのように信じたのでした。

確かに、キリストが二千年前（日本では弥生時代）に十字架に磔られて亡くなられ、三日目に甦られたことが「歴史的事実」と認定されても、それだけでは、正直な話、私たちには直接関係はないと思えるかもしれません。しかし、復活された主が、今や聖霊として私たちの裡に臨在されるという、キリスト・イエス様と私たちとの霊的、生命的な繋がりを知り、信ずるに至るならば、私たちの存在において、主の十字架の重大な意味が生き生きと立ってまいります。私たちがこの世に生まれた意味、主と共にこの世を生きてゆく意味は、そこに集約されます。

また、十字架上で、神の呪われた者として死なれ、陰府に下られた主イエス様を、三日目に呪いを解かれて復活させられた御父が、終わりの日に私たちをも復活させてくださり、永遠の御国で、新しい体と永遠の命とをお与くださるのです。このことを信じる信仰によって、この世における、死の恐怖、離別の悲哀を乗り越えることができ、御国においては、想像を遥かに超える至福に溢れた「神の安息」が、贖いの主によって保障されるのです。

パウロが、先達のキリスト者から受け継いだこの福音は、単なる知識や情報ではなく、倫理的・道徳的な教えでもありません。私たちの救い主、御子イエス・キリストが十字架上で、私たち人間が神様に背き続けてきた原罪を、完全に覆い、担い、贖ってくださり、更には、陰府に下られた後、復活を果たされたという「神の真理」であります。

その福音を信ずる信仰によって、主は、私たちにも死後の復活と永遠の命を約束してく

ださいます。更に御国では、主の御許における御慈愛に包まれて、永遠に主にお仕えする者となしてくださる「神の安息」の授与を、果たしてくださいます。

私たちは、この福音が意味する「真理の帯」をしっかり締めて、キリスト者の名に恥じない、相応しい聖い生き方を貫く中で、パウロに倣って主を宣べ伝える伝道に励み、次世代のキリスト者に、素晴らしい主の福音を引き継いでまいりましょう。

しばし、復活と現臨のイエス様に心に向け、黙祷をお捧げ致しましょう。完

< 写者あとがき > 2025年8月11日

第7回の2025年2月の掲載から8月まで休みました。当初の理由は、松山幸生先生が講述された月に合わせ、季節感を同じにして読むことによって、違和感をなくしたいという意図からでした。

1、ところが、休んだ瞬間に、私が予想もしなかった大きなプロジェクトが舞い込んで来て、その主役にならなければならなくなりました。「隙間を作ると、試みに遭う」ことになりました。

ヘブライ人への手紙の最初の勧告と言われる2章1節「**私たちは聞いたことに、いっそう注意を払わねばなりません。そうでないと、押し流されてしまいます。無頓着ではなりません。**」の教えを蔑ろにしまいそうな試みに、遭遇したのです。

私たちの最終地点である「**神の家に入る**」ためには「**確信と希望に満ちた誇りを持ち続けること (3章6節b)**」「**最初の確信を最後までしっかりと持ち続けること (3章14節)**」が必要です。現実の日々は「私の力でなんとかしよう。私の力ならば、なんとかできるだろう」という形而上の理念に陥りがちです。そして、そのことは「御子によって啓示され、約束された最後の審判からの救い」なる最終的な安息、即ち絶対的な神の安息への道から逸れてしまう危険性があります。現世の成功（自分や世間の期待に沿うこと）を追い求めることによって、神の意図される安息の道から押し流されて行ってしまうのです。

事実、この3月から7月まで、礼拝と聖餐に与りながらも、私自身の聖書研究を怠っていました。毎夜の祈りはそのことへの懺悔でありました。多忙は神の安息の敵なのです。

現代の働き手の中核にいる人たちは、スケジュール表に空白があると不安になると言って懸命に埋めようと努力している。極端な人は月曜日から金曜日まで目一杯働いて週末はひたすら眠る生活が続いているという。50代になるとこの生活はきついと漏らしています。与えられる仕事をこなすだけで精一杯、改善提案をする暇はない。そういう方が私の友人にもいます。かつての私も例外ではなかったのです。今もその危険性があります。

このような状況を見越しておられた松山幸生先生は既に30年前に「ヘブライ人への手紙に学ぶ」を通して、我々に警告を発しておられます。

2、「**神が安息の中でのみ告げられること**」この表題は私に重くのしかかりました。

松山先生の本文を繰り返し読んでいきますと、なんとなく分かったような気分になります。そして聖書を読み直してみると自分が呆れるほど理解ができていない。そこでレイマン(普通の信徒)の私にしか出来ないような質問を森容子先生に投げかけるということが続いています。

今回、私が難儀しましたことは

1節「だから、神の安息にあずかる約束がまだ続いている」

6節「そこで、この安息にあずかるはずの人々がまだ残っていることになり」

9節「そこで、安息の休みが神の民に残されているのです。」

この「まだ残っている」「残っている」「残されている」の理解ができませんでした。森先生のご指摘は、観点が違いました。6節の「この安息にあずかるはずの人々」と9節の「神の民」は同じで、キリスト者になろうとしなかったかつての選民ユダヤ人を指すと教わりました。すると、1節も選民ユダヤ人に向けての言葉であることが領けました。

ここで気づいたことは、聖書の読み方で注意することの一つで、書かれた年代と聞く対象は誰か、そして時代背景(歴史)を知っておかねばならないこと。レイマンには難しすぎる。御言は教会の説教を通して学ばねばならない。

そして10節は、2017年の聖書協会共同訳が分かりやすいとも教えられました。

(松山先生のこの講述は1996年で引用聖書は「新共同訳」です。)

「**実際、神の安息に入った者は、神が御業を終えて休まれたように、自分の業を終えて休んだのです。**」この文脈から、「神の安息」とは、死後に御国において与えられる絶対的な「神との交わりによる安息」であることが分かります。(「**神が休まれた**」という動詞は、継続を表す完了形ではなく一回性の過去形(アオリスト形)動詞だそうです。ですから、神は創造の七日目には一度(一旦)休まれた。そうして、御国において創造の業を再開された。再開された創造の業の中でも最も大いなることは、御子イエス・キリストの受肉という着想に始まり、十字架と復活、昇天と聖霊降臨ではないかと考えます。レイマンの発想です)

3、ここから、私の疑問が再び湧き出しました。安息の定義が知りたい。今更と言われてもレイマンの特権です。(一般的には常識のことが分からない、聴くには勇気が入ります)3章7節から4章13節には「**神の民の安息**」という小見出しがついており、安息に入るには何をすべきかが詳しく書かれていますが、安息の定義がありません。聖書の後にある用語解説には「安息日」はありますが、「安息」はないのです。

「安息とは何か」2章の「大いなる救い」に関係があるかも知れないと思い、松山先生の第7回と第8回を熟読しました。今の段階で私が記せることは次のことで精一杯です。

(1) 絶対的な神の安息

天国での安息、究極的かつ永遠の安息、私たちがやがて辿り着こうと志している、これ以上の終着点はない最高地点、という安息地で、神と共にある永遠の命にあずかること。

「神の御腕に抱かれる」と表現してもいいでしょうか。

この「神による安息」に与る者とは、「今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである。然り、彼らは労苦を解かれて安らぎを得る。その行いが報われたからである。」（ヨハネ黙示録14章13節）と記されています。

また、その行いとは「最初の確信を最後までしっかりと持ち続けるなら、キリストに連なる者になるのです。」（ヘブライ人への手紙3章14節）とあり、最初の確信とは「最も大切なこととして、パウロが語り伝えたコリント人への手紙一15章3節から6節の言葉」と、考えています。

(2) この世における霊的安息

このような言葉があるかどうか分かりませんが、「御国の前味わい」とも教わりました。神のご支配は、終末期の最期に至ってから始まるのではなく、キリストの御降誕により、既に始まっています。それは更に、聖霊が与えられて神に導かれているのだから、従ってこの世にも安息は用意されていると信じます。乏しい私の実感として、それを二つに分けて考えました。

① 聖日における安息

「説教と共に働く聖霊」によって、教会の中では、個人的にも共同体的にも霊的な安息があると実感します。「主、語りたまう、我は聴くなり」との呼応関係において、私たちは人格的な神のお近くにいて、神が共にいてくださると実感できると思います。信仰から信仰への道「確信と希望に満ちた誇りとを持ち続ける」には説教を聴く以外にないというのが私の信仰体験です。七日目に、神は創造の後に自ら休まれたことしか書かれていませんが、神は安息の中で「わたしが休んだようにあなたがたも休みなさい。わたしの声を聴くために。」と言われたのではないのでしょうか。レイマン故に記せることです。

② 日常生活における安息

日常生活においても主の御恵みを実感して感謝することがあります。感謝は喜びと共に湧き出てくることが多いですが、患難の只中にあっても祈ることができ、神の招きに応じて自らの身をすべてお委ねするとき、主の御声が聞こえる時があります。苦悶しながらも聖書に向かうことができる力が与えられているように思います。また、創造的着想は、安息の只中の、意図しない瞬間に生まれるということも、多くの学者が語っておられます。

人生の完熟期にある私がどうあるべきかを、今尚、正しく指し示してくださるのが、松山幸生先生です。ご生前に、幾度も「自分の力でなんとかしようと思うことは罪だよ」「主に任せよ、汝が身を」と優しく諭してくださいました。そして讃美歌21の470番を共に歌ってくださった日を、感謝の涙をもって思い出しています。

讃美歌21－470番

1、やさしい目が きよらかな目が、きょうもわたしを、見ていてくださる。

「まっすぐに あるきなさい」と 見ていてくださる。

2、大きな手が、あたたかい手が、きょうもわたしを、支えてくださる。

「はなれずに あるきなさい」と 支えてくださる。

3、かぎりない ひろい心が、きょうもわたしを守ってくださる。

「やすらかに あるきなさい」と守ってくださる。

今、先生のお写真を見ながら「先生、『神が安息の中でのみ告げられたこと』はなんですか」とお尋ねしたくなりました。きっと先生は「あなたはなんだと思いますか」と言われるでしょう。私はなんと答えるべきでしょうか。自問します。

神が安息されたのは、創造を開始して七日目。何もなさらず、御言葉かけだけがあったとすれば、「わたしはあなたがたにとって、わたしはいる、という者である。」「わたしは、最高の羊飼いである小羊を、あなたがたに贈ろう。」・・・でしょうか。

今回も森容子先生には並々ならないご苦勞をおかけしご指導いただきました。一人では一歩も前に出ることができないところに光を与えてくださいます。この訓練を安心して最後まで遂行できる特別の牧師先生を与えられ感謝です。森容子先生は今年の4月から東京都葛飾区の日本基督教団水元教会に赴任されました。

松山幸生先生の現実の歴史を見る目は秀徹の一言です。今は31年前よりも日本の状況は軍事に偏っています。アメリカからは軍事費予算をGDPの3.5%要求される危険性があります。物価高のみならず医療と福祉の現場では毎日の対応に悲鳴に近い声が揚がっています。軍事費がなければ国民の生活は大いに改善されます。ここでの松山幸生先生のお声を聞きたいです。どうか主よ、教育界、宗教界のトップからの声が政治に届きますように。政治家が真理と公平をもって国を納め、世界の平和に目を向けてくれるように祈ります。

2025年8月11日

小原靖夫